もちもち堂
エロ漫画にいるような童貞に優しい女になろうと性転換したら幼馴染を好きになってしまい心まで雌に堕ちる話

21世紀
科学の進歩により人類は性への自由を
手に入れた。
昨日まで男だった者が今日は女になって
いる。そして、その逆も然り。そんな風景
がありふれた世界。
各々が自らの性を好きに選べる時代なのだ。

「…そう、だから俺が女になっても何もおかしい事なんてないんだよ、亮！」
「何で自信満々なのか知らないけど僕たちくらいの年なら、まだ親に相談してからするのが普通だからね」

「いきなりオバサンから息子が女になったって呼び出される僕の気持ちわかる？」
「しかも驚きすぎて未だにオバサン気を失っているし」
「ふんっ！母さんは時代遅れなんだよ。今はこんなの普通だっていうのに」

「はぁ…まぁ凛音が突拍子もないことをするのは、いつものことだしもういいよ」
「で、何の目的で女になったの？流石に何の理由もなしにこんなことするなんて思えないしね」
「ふふ♪よくぞ聞いてくれた！」

「俺はな…エロ漫画に出てくるような童貞に優しい女の子になりたいんだ！」
「……は？」
「本当はなりたいっていうよりもそういう娘に会いたかったんだけど…現実にはそんな娘は全然いなかったんだけどな」
「男から女になった奴らも、体に心まで引っ張られたのか、いつの間にか普通の女のようになってやがってさ…誰も俺の頼みを聞いてもくれないんだ」

「何処を探しても理想の女の子なんて
いなかった…けど、俺は気付いたんだ!!!」
「いないなら俺がそれになればいいって!」

「だから凛音が女になった、と…」
「ああ！そうだ！」
「分かるか？今、童貞の…いや、俺たちの夢が叶おうとしているんだ！」
「取り合えず、お前が考え無しなのはわかった。…いや、考え無しなのは、いつものことだったな」

「まぁ、戻ろうと思えばいつでも戻れるんだろうし、とやかくは言わないよ…」
「それじゃあ僕はもう帰るからな…あんまり変なことしてオバサンを心配させるなよ」
「…え、あ、おいっ！」

「……」
「あいつ本当に帰りやがった。
…たく！ロマンの分からん奴め」
（せっかく幼馴染の童貞野郎に女体の実験に手伝わせてやろうと思ったのに、なんて友達がいのない奴なんだ）
（…まぁ、何だかんだで、いつでも最後には隣にいてくれるし良い奴なのは間違いないんだけど）

何故かあいつの顔を思い浮かべると
少しドキドキと胸が鳴って妙に下腹部
がムズムズする。
これも女になった影響なのだろうか？
「……取り合えずやることもないし
女の体というものを色々と経験
してみるか」

「自分の体触るだけなのに、何か緊張するな。女の体でオナニーするなんて初めてだからかな？」
いつの間にかに湿っていた秘所に手を伸ばしゆっくりと確認するように指を這わす。
ん
ドクッ
ラ～～ラ～～
ぬぐぬぐ

「んっ…❤は、あっ❤なんだ、これ…っ❤」
軽く触れただけだというのに俺の体はびくりと跳ね上がり、今まで感じたことのない快感が背筋を走る。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
さわさわっ

「はぁ…ぁ❤ああぁっ❤んく、うっ❤」
「あ、う…っ❤指で少し弄ってるだけなのにどんどんエッチな汁が溢れてくる❤っ…ぁ❤おまんこクチュクチュするの気持ちいいっ❤」
ん
ラ…ぐッ
ラ〜〜〜
どクッ
さわさわっ
ひくッ ひくッ

「すげぇ…❤女の体ってこんなにエロいんだぁ❤これなら簡単に男を誘えそうだな♪」
より強い快楽を求め、自分が男に抱かれているところを想像しながら秘所を弄る。
はぁ❤
ビクッ
ブーン
さわさわ
秘所

興奮して来たのか口からは甘い吐息が漏れてしまう。男の時とはまた違った快感に俺は夢中になり手を止めることが出来なかった。

女の快楽という今まで知らなかった波が押し寄せると同時にぼんやりと輪郭が定まらなかった妄想の中の男の顔が亮のモノになる。

（は、あっ…!?何でこんな時、あいつの顔を思い出すんだよ俺は！）
意識してしまうと急に恥ずかしくなってしまうが、指は俺の意思を無視するように動き、止まってくれない。
ビクッ
ビクッ
ラ～～～
ラ…くッ
さわさわっ

（う、くぅっ❤なんで俺、亮の顔思い出しながら…っ❤）
「ひぅっ❤ん、んんっ❤あ、く…ぅっ❤」
ビクッ
ビクッ
ラ…ぐッ
ラ～～
さわさわっ

（身体がビクビク震えて…っ♥あぁっ♥
無理…っ♥もう、イ、クぅ…っ♥）
この時の俺は。自分の口から出た淫猥な
雌声に気付くことも出来ず、押し寄せる
快楽に身を任せ激しく絶頂した。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ラ…ぐッ
ラ～～
ラ～～
ぴちゃ♥
ぴちゃ♥
ぴちゃ♥

「ふふ、ようやく届いたぞ！」
俺は奇麗に包装された箱からそれを…
『ディルド』を取り出す。
ついに買ってしまったそれを持ち、
まじまじと見る。…もちろん、コレを
買ったのには理由がある。

あの日…最初に女の体でオナニーをした
その日から、あいつの…亮の顔がちらつ
いて離れないのだ。
そのせいで亮と話していてもそれを
意識して、ギクシャクしてしまう
日々を送ってしまっていた。
その事を忘れようと、他の男でオナニー
をしても、逆に悶々とした気持ちに
なってしまう。

（オナニーしてるときに毎回毎回あいつの顔が浮かぶのは好きだからとかじゃなくて、ただ単に身近にいる男があいつぐらいだから、だ……！）
（そうだ、そうじゃなきゃ、俺がこんな感情に振り回されるなんて…こんなのおかしい…っ）

俺は自分の理想の為に女になったのだ。
それが一人の男を気にして、まるで普通の女のように振舞うなどあってはならない。
だから俺は考え、思いついた。
今のこの気持ちを消すには、あいつのことを思い出さないくらい、より強い快楽で上書きすればいいと。

そしてその為にこれを買ったのだ。
……流石に、いきなり知らない相手とするのは怖いしな。

「よし…やるぞ！」
服を脱ぎ、ディルドに跨ると、緊張を振り払うように声を出し自分を鼓舞する。
僅かに震える体を誤魔化し、ローションで十分に濡らしたディルドを秘所に押し当てると勢いのままに腰を落とす。
ビクッ
ラ…ッ
ラ…ッ

「うぐっ……！っ……あっ！ぐ、ぎぃっ！」
メリメリと内側から裂けるような感覚に苦痛の声が漏れてしまう。
準備不足で身体がまだ硬かったのか、それとも物が大きすぎたのか、ディルドは根元まで入らずに止まってしまう。
ビクッ
しゅぐ

（ヤバい、ヤバい、ヤバいっ！
これっ、マジで痛いっ！）
（オナニーが気持ちよかったから、
これもイケるかと思ってたけど…
むりっ！…マジ無理っ！）
あまりの痛みに、何の為にこんな事を
しているのか忘れ泣きそうになって
しまう。
ビクッ
ん…

(うぅ…こんなんじゃ、また亮に呆れられる。ホント…俺なにしてるんだろうな)
情けなさで惨めになると同時に亮の顔を思い浮かべたおかげか、痛みとは別の…快楽という感覚が下腹部を襲う。
動かせなかったはずのそれは、秘所から溢れた愛液を潤滑油に少しづつ奥へと進む。
ビクッ
はぁ♥
ハーハー♥
ハーハー♥

（う、く…っ❤これって、やっぱり俺があいつを意識してるから体が反応してるのか？）
ジンジンとした痛みはまだある。
だが、これがあいつのだと思うと体が勝手に愛液を溢れさせてしまうのだ。
ビクッ
ん❤
ぐぐ
ぐぐ
ラーラー

（あぁぁ～～！どうしよう、どうしよう！俺はただ童貞たちに優しい理想の女になって、色んな男たちとしたかっただけなのにっ！）
（…それなのに！何でこうも、あいつのことばかり考えちゃうんだよぉ～！）
（あぁ…わかんない…わかんないけど、亮でするオナニー、気持ちいいよぉ…❤）
ビクッ
はぁ❤
ハーハー❤
ハーハー❤
ズプ
ズプ

「ひぁっ❤う…くぅっ❤」
意識すればするほど秘所は愛液を滴らせる。痛みも徐々に快感に塗り替わり口から艶やかな声が漏れてしまう。
ビクッ
はぁ❤
ハーハー❤
ハーハー❤
ズプ
ズプ

「うっ、あぁっ❤だめ、だっ❤
気持ちいいの止まらないっ❤」
「あ…っ❤あ、くぅ❤お腹の奥、
おっきいのでいっぱいに…っ❤」
より深く、女の甘く痺れる快楽を
求め、腰が無意識に動いてしまう。
ビクッ
あぁぁぁ
ハーハー
ハーハー
ズプ
ズプ

「あ、あああぁっ❤もうイク…っ❤
ひぁ❤あああぁっ❤イっちゃうっ❤」
「んっ❤んん～～～っ❤」
イったばかりだというのにこれが
亮との行為と想像するだけで胸の
高鳴りと身体の火照りは止まらな
くなる。
ビュッ❤ビュッ❤
ん❤
ひくッ
ひくッ

「はぁ…はぁ…❤んっ❤…これ、はもう直接確かめるしかないよな…」
ビッ❤ビッ❤
ぴくっ
ぴくっ

「え、なにこれ!?呼び出されたから来たけど、何でいきなり押し倒されてるの僕!?」
「いや、ちょっと確かめたいことがあってな。その為に少し協力して欲しいんだ」
ブーン
ドキ♥
ドキ♥
ビクッ

「……協力って」
「この状況で分からないわけないよな」
「それにほら、チンコの方はこんなに素直なんだからさ♪」
ん
ドキ♥ドキ♥
はぁ♥
どくどく

「……童貞たちに優しい女になるんじゃなかったの？」
「それは一旦いい…って、それより…えっ！いや、お前童貞じゃないの!?」
「…いや、童貞だけどさ」
驚愕の表情を浮かべる俺にバツが悪そうに顔を背け、頬を赤らめながら亮はぽつりと小さく言葉を零す。
ラ～～～
ラぐッ
どぐどぐ

「…はぁ。なんだよ、驚かすなよな」
てっきり彼女でもいるのかと焦り驚いてしまった。
まあ、いつも一緒にいるんだし落ち着いて考えれば、そんなのいないと分かりそうなものなのだが、如何やら俺もかなり緊張してたみたいだ。
俺は、はやる気持ちを落ち着かせようと深呼吸をし覚悟を決める。
ハーーッ♥
はぁ♥

「じゃあ、動くぞ」
下着越しに性器を合わせゆっくりと
擦るように動き始める。
布越しに感じるビクビクと脈打つ肉棒の
感覚に、むず痒いような喜びと焦がれる
ような期待感で胸が締め付けられる。
んっ
ビクッ
はあっ
ぞわぞわっ
さわさわっ

「んっ♥は、あぁっ♥んく…っ♥」
肉棒にクリトリスが擦られるたび
今まで感じられなかった快感が
押し寄せる。
亮が相手だというだけでこうも
簡単に濡れてしまうのだ。
ぶるぶるっ
はぁ♥
ぶるぶるっ
ぶるぶるっ

（やっぱり一人でするより
濡れ方が全然違うよな…）
（それに亮とするって思ったら
胸がすごいドキドキして張り
裂けそうで苦しい❤）
もう自分への誤魔化しは効かない。
俺は女として此奴のことが好きなのだ。
それを自覚してしまってからは
俺は自分を止められなかった。
ぶるぶる
はぁ❤
はぁ〜ん❤
されされ

「は、あぁっ❤おく、いっぱいに入って…❤んっ❤んんっ❤あぁ…っ❤」
愛撫で滾った肉棒を秘所へと押し当て挿入する。待ち望んだ瞬間に体が震え一つになれたことに喜びと幸福感で満たされる。
ぶんっ
どクッ
ぶるるっ
ぶるるっ
はぁ❤

「ひぁっ❤あっ❤これ、すご、いっ❤
は、あっ❤オナニーなんかより全然
気持ちいいっ❤」
「んひぃっ❤オマンコ勝手にチンコに
絡み付いていっちゃうよぉ❤」
ん
ビクッ
ラ〜〜〜
ラ…ッ
ズボッ
ズボッ
ズボ
ズボ

「う…く、ぅっ！」
「はぁ…❤はぁ…❤あ、はっ❤亮も俺のオマンコ気持ちいいんだろ？チンコなかでビクンビクンって跳ねてるぞ❤」
イキそうになるのを必死に堪える亮が可愛く、そして自分がその顔をさせていると思うと嬉しくなり腰の動きを速めてしまう。
はぁ❤
ビクッ
ブルルッ
ゾクゾクッ
あぁぁぁ❤
ズプ❤ズプ❤

「ふぁ❤あっ❤あぁっ❤なか、チンコがゴリゴリあたって…っ❤すごいよ、亮❤これ滅茶苦茶、気持ちいいっ❤」
「凛音っ、ま、ってっ！そんなに激しくされたら、僕…っ！」
制止の言葉も聞かず俺は快楽のままに腰を動かす。
はぁ❤
ドクッ
ラーラー
ゾクゾクッ
あぁぁぁ❤
ズプ❤ズプ❤

「っく！あ、あぁっ！」
びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
膣内で肉棒が一際大きく震えると同時に
子宮内に熱い精液が叩き付けられる。
はぁ♥
ぶるるる～
どくっ
ゾクゾクッ
あぁぁぁ♥
びゅる
びゅ～♥

「ん…あ、あっ❤お腹の奥にあっついのがビチャビチャ掛かって…」
「ご、ごめん！僕、我慢出来なくてなかに…」
「んっ❤大丈夫。ちゃんとピル飲んで準備してたから。…だから、さ。このまま続けてもいいよな❤」
ん
ビクッ
ゾクゾッ
はぁ❤
はぁ〜ん❤
ゾクゾッ❤

「んっ❤ガチガチで一回出しただけじゃ、まだまだ足りないだろ？」
「ほら、トロトロのオマンコにチンコぶち込んでいいんだぞ❤」
「凛音、僕…っ！」
「俺も、さ。もっとして欲しいんだ。…だから、な❤」
ん。
ドキ❤ドキ❤ハーッ❤ハーッ❤
はぁ❤
ひくッ
ひくッ

愛液と精液でドロドロに湿った下着を横にずらし、お尻を振りながら挿入を促す。
その仕草はまるで発情した雌そのものだが俺も亮もそんなこと気にする余裕もなく今の俺たちは唯やる事しか頭になかった。
はぁ〜ぅ♥
ドキ♥ドキ♥
ハ〜〜〜ッ♥ハ〜〜〜ッ♥
はぁ♥

「あっ❤あぁっ❤はぁ…❤後ろからチンコ、ズブズブ入ってきたぁ❤」
「は、あぁっ❤ゴリゴリ抉って…っ❤んひぃ❤俺の中…っ❤奥まで広げられちゃうよぉ❤」
はぁ〜ぐ❤
ドキ❤ドキ❤ハ〜〜〜ッ❤ハ〜〜〜ッ❤
はぁ❤
パン！パン！
ズダ ズダ

「ふ、ぅぁ❤ひぁっ❤乱暴に突かれて
掻き回されるの、気持ちいいっ❤❤
玩具なんかより全然いいよぉ❤」
余裕のないひたすら単調な動きのはず
なのにグリグリと肉棒を押し付けられ
るたび、体は喜びに震え口からは雌の
発情した嬌声が漏れてしまう。
ん。
ドキ❤
ドキ❤
ハーッ❤
ハーッ❤
はぁ❤
ぬぷ！
ぬぷ！

（これ想像よりもやばいぞ…っ❤亮とのセックス気持ちよすぎて頭おかしくなりそう…❤）
（は、あぁ…っ❤もう、好きなのにもっと、好きになっちまうよぉ❤）
（ダメだっ❤もう亮以外とのセックスなんて考えられない❤）
（俺もう、女になった目的なんてどうでもよくなってる…っ❤）
ぱんぱん！
ぱんぱん！
ぱんぱん！
ドキ♥ドキ♥ハーハー♥
はぁ♥

「はぁっ❤あ、あぅっ❤あくぅっ❤」
「後ろからガツガツ突かれて…っ❤ふぁっ❤あぁっ❤これ、犯されてるみたいで…❤あっ❤興奮する…っ❤」
「ふ、くぅっ❤あ、あぁ…っ❤敏感になってる、とこ、抉られて…っ❤」
ん♡
ドキ♡ドキ♡ハーハー♡
ラブッ
パン！パン！

「これ以上され、たら、俺もう…っ♥」
媚びるような声で亮を求め、もっと欲しいと言わんばかりに腰を押し付ける。
そんな俺に応えてくれるように亮はより一層腰をぶつける。
はぁぁ♥
はぁ♥
ドキ♥ドキ♥ハーハー♥
パン！パン！
ズダ ズダ

「はぁっ❤はぁっ❤あぅっ❤りょう…っ❤りょう…っ❤」
「り、お…っ❤」
少しでも亮に気持ちよくなって欲しくて自分からも腰を動かしながら、膣を締め付ける。
ドキ❤ドキ❤ハーハー❤
はぁ❤

「く、ぅ…っ❤凛音、僕もう…っ❤」
「あはっ❤お腹の中でチンコびくびくしてるぞ❤もう出したいのか？」
「ふふ❤いいぞ❤俺もイきそうだからこのまま、一緒にいこう❤」
ん。
ドキ♥ドキ♥ハーハー♥
はぁ♥
パン！パン！

びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
「おほぉっ❤おぉっ❤あっつい精液、おくにドプドプ出されてるぅ❤」
「はぁっ❤あぁっ❤お腹のなか、亮のでいっぱいにされてりゅぅ❤」
ビュルルルッ
ビュルルルッ
ドキ❤ドキ❤ハーハー❤
ラグッ

精液が子宮に掛けられるたび絶頂し
快感でビクビクと跳ね上がってしまう。
絶え間なく来る快楽の波と溢れ出る
ほどの精液を受け止めながら、俺は
身体が一人の男の為に変えられて
いくような感覚に浸るのであった。

性転換したら今までの人間関係が変わると聞いていた。…ただ、ここまですごいモノなんて思いもしなかったのだ。
自分の中のあいつへの友情が徐々に別の…そう、男女の愛情に変わりつつ…いや、変わってしまうなんて。

（…どうしよう。こんなのバレたら
気持ち悪いって嫌われるよな）
（いくらセックスしたからって
あいつは俺のこと普通の男友達
としか思ってないだろうし…）
（あぁ、やべぇ。死にたくなってきた。
こんな事なら女になんてなるんじゃ
なかった）

…でも、もう男に戻りたくない。
この気持ちをなかったことになんて
したくないのだ。いや、そもそも
こんなこと考えてる時点で今更だ。
グダグダと頭を抱えながら考えて
いるとふと一つの案が頭の隅を
よぎった。
「…そうだ。俺が他の女よりも
特別だって思わせれば良いんだ」
何だ簡単なことじゃないか。

「あの、さ。何でこんな事になってるの？僕たち」
「何だよ、せっかくロでしてやろうってのに、嫌なのかよ」
「嫌ってわけじゃないけどさ。僕もう童貞じゃないんだけど…その、いいの？」
ビクッ
ラ～ラ～

「それは、その…まだ知らない奴とやるのは怖いし、亮相手なら嫌じゃないから…あ～！もう、変なこと聞くなよな!!」
「ご、ごめん！凛音がいいなら別に構わないんだ」
ドキ♥ドキ♥
ビクッ
恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染めながら自分の気持ちを誤魔化すように捲し立て。ぼろが出ないうちに始める。

「あむ、ちゅる…んっ❤じゅる…っ❤
んちゅ❤ちゅろ、ちゅ、ちゅぶ…ちゅ❤」
「ちゅぷ❤…はぁ❤はぁ❤んくっ❤
じゅる、じゅるる~っ❤じゅぷぷっ❤」
ん~
ラ~~
ラ~~
じゅる
ちゅぷっ
ちゅぷ
ビクッ

（わかっていたけど、此奴のチンコ間近で見るとやっぱりデカいな。）
（それに、この味と臭い…❤男の汗臭さとしょっぱさで美味しくないはずなのに、もっと欲しくて舌が止まらない）
ぐぽ❤
ぐぽ❤
ビクッ
じゅる
ラーラーラー
ムズ

「はむ、ちゅ❤じゅる…じゅるる❤」
（口いっぱいに亮の味が広がって
咥えてるだけで頭がボーっとしてくる❤）
口で奉仕しているだけのはずなのに
下着は愛液でグショグショになって
しまい。気付けば指が勝手にクリトリス
を弄り始めてしまっていた。
ムズ
ムズ
ぐぽ❤
ぐぽ❤
じゅる
ビクッ

（う、ぐっ！何で舐めながらそんなに切なげな顔で見てくるんだよ）
（凛音ってこんなに可愛かったっけ？仕草や雰囲気も最近は、まるで普通の女の子だし）
（あ、いや、今は女の体なのは確かなんだけど…それでも、これは…）
ドキ♥ドキ♥
くぽ♥くぽ♥
ビクッ
じゅる
ムズ
ムズ

（……そりゃあ、セックスは気持ち良かったし、シてる最中は特に気にしなかったけど）
（相手はつい数日前まで男で、アホな理由で女になった奴なんだぞっ）
（あぁっ！何で僕が凛音のことでこんなにモヤモヤしなくちゃいけないんだよ！）
ん～
ラ～ラ～
ドキ♥ドキ♥
くぽ♥くぽ♥
ビクッ
じゅる

口の中で血管がビクビクと脈打ち肉棒がひときわ大きく膨らむ。亮の限界を感じ取った俺はさらに深くまで咥え込みストロークを速める。
喉の奥に亀頭がぶつかると嘔吐いてしまいそうになるが、亮の気持ちよさそうな顔を見ていると不思議と我慢できた。
ぢゅる
ビクッ
くぽ♥
くぽ♥
ぢゅぐ
ぢゅぐ

「んんっ❤っ❤ん❤んぅっ❤むぐぅっ❤」
「う、お❤お、おぉっ❤口の中で舌が絡まってっ❤」
「…凛音っ、やばい！僕、もう…で、るっ！」
「いいぉ❤ほぉのまま、くひに、らひてぇ❤」
「ぁっ❤ぁぁっ❤でる…っ❤凛音の口の中に…っ❤」
ちゅぷっ ちゅぷ
ビクッ
じゅる

びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
「んぶっ！おごっ！うごっ！げほっ！」
亮は腰を突き上げ喉奥に押し付けるように射精した。勢いよく叩き付けられる精液のあまりの苦しさに吐きそうになるのを耐え、少しでも零したくない気持ちで必死に飲み干していく。
ぶるるる～～～
ビクッ

「…っ！ご、ごめん！気持ちよすぎて、つい」
「んぶっ！ん、んんっ、ん、く…ぷはぁ♥はぁ…♥はぁ…♥ん、大丈夫」
「俺も元男だから気持ちはわかるし気にしなくていいよ」
「それより…どう、だった？俺、お前以外の男とこういう事したことないから…その、あんまり自信ないけど」
ハ～～♥
ハ～～♥
ビクッ
とろ～ぉ

「初めてだから他と比べようがないけど…き、気持ちよかったよ、すっごく」
不安げな表情で見上げる俺を亮は顔を真っ赤にし目をそらしながらも褒めてくれる。
ぶるるっ
ぶん
とろ～ぉ
ビクッ

自分でも言ったが初めてで、ぎこちないそれがそこまで上手くいったとは思えない。
それでも亮は俺を気遣ってくれる。
そんな優しさに嬉しくなってしまうあたり俺はもう駄目なのだろう。
ラーラー
はあ♥
とろ〜ぉ
ビクッ

ベットの上で服を脱がされ男の時とは
全く違う、傷一つない白い肌を露わに
させられる。
亮にじっと見つめられているだけで
身体が火照り、息が荒くなってしまい。
それを悟られないように腕で顔を隠す。
ぐすっ

「いくぞ、入れるからね」
「ん…いいぞ❤」
初めての時よりもはち切れそうなほど熱く滾る肉棒。
こんなモノが入ってしまったら俺はどうなってしまうのかと、緊張と期待で心臓がバクバクと激しく鼓動する。

「ふ、ぅ…っ❤ぅぅ…あ、ぅっ❤」
秘所に押し当てられた肉棒はゆっくりと
膣肉を掻き分けるように侵入してくる。
お互いの合意の上でのセックスは、最初
よりもより強く亮を意識してしまい。
恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまう。
ゆ、ゆゆゆ
ビッ❤ビッ❤

「凛音、何で顔隠してるの？」
「ま…っ！ちょっとまって！いま、やばいっ！絶対見せられない顔してるからっ！」
「凛音…顔、見せて。今の凛音の顔みたい…」
「……っ♥」
はぁッ♥
ビッ♥ビッ♥

「〜〜〜〜っ!!う、っくぅ〜〜〜〜っ!!」
男の腕力には勝てず直ぐに腕をどけられ、
蕩け赤く染まった顔を見られる。
俺は発情した雌のような顔を見られた
恥ずかしさで、声にならない声を漏ら
してしまう。
ビーン♥ビーン♥
ビッ♥ビッ♥
ラブッ

「ばかっ…！見るなって言ったのに！
うぅ～っ、こんな顔見られたくなかったのに…っ」
「えっ、なんで？…その、すごい可愛いと思うよ」
「はぁっ！か、可愛いとかいうな～！」
…俺は単純なのだろう。ただ可愛いと言われただけで身体は嬉しさで喜び震えてしまう。
ビーンッ♥ビーンッ♥
ビクッ♥ビクッ♥
ゆゆゆゆ♥
ぐぐ ぐぐ

そんな俺の姿に興奮したのか、亮は腰を
強く掴むとより激しく肉棒を打ち付ける。
蕩けきった膣内を抉られるたび脳を焼く
ような快感に包まれ、膣肉は精液を搾り
取ろうと蠢きイチモツに絡み付く。
ハーハー
ビッビッ
ハッハッ

「おっ❤おおぁっ❤深いいっ❤
う、ぁ❤これ、すごいよぉ…❤」
「あ、あぁっ❤亮のチンコなかで
ビクビクって跳ねて…❤」
ビッ❤ビッ❤
ビーッ❤ビーッ❤
AHH AHH❤

肉棒が抉り進むたび中でより硬く反り返るのが伝わり。痙攣するように震える。
「はぁっ❤はぁっ❤…っ❤凛音の、中気持ちよすぎてっ…もう、でるっ！おくに…一番奥に出すからね！」
ビュッ❤ビュッ❤
ビュッ❤ビュッ❤
ビュッ❤ビュッ❤

びゅぶるるる～～～っ♥
「ふきゅうっ♥あっ♥ひぁっ♥お腹の
おく、だめ…っ♥うきゅっ♥あぁっ♥
い、くっ♥イっちゃうっ♥」
絶え間なく来る快感に最早何の抵抗も
出来ず、俺は絶頂を繰り返した。
ビーッ♥ビーッ♥
ビッ♥ビッ♥
はぁ♥
びゅるるるっ♥

「亮はこうやっておっぱいでギューってされるのが好きなんだろ？」
「はぁ…んくっ！あ、あっ！凛音っ…！」
「ほら、これはどうだ？えい❤えい❤」
胸の中でビクビクと脈打つ肉棒をカウパーを潤滑油にし擦り合わせ刺激する。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「…くっ！凛音のおっぱい柔らかくて吸い付いてきそうで…っ❤あ、あぁっ❤腰が、勝手に動くっ…❤」
「おいおい♪だらしない顔しやがって。俺のおっぱいがそんなに気持ちいいのかよ❤」
「胸のなかでこんなにバキバキにして…お前ホント元気だな❤」

「あ～ぁ♪カウパーでおっぱい
ぬちゃぬちゃになっちまったな❤」
「だって、凛音のおっぱい気持ち
いいからっ」
はぁ❤
「だからって腰振りすぎだろ❤
チンコ擦れ過ぎておっぱい
火傷しちゃいそうだぞ❤」
どくっ
ムニュ
ムニュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ❤

（うわぁ❤チンコすげぇ熱くて脈打ってる❤こんなの挟んでたらこっちまでエロい気分になって来ちまう❤）
（どうしようこっちのドキドキ伝わってないよな？大丈夫だよな？）
ビクッ

谷間に挟まれた肉棒が突き入れられる
たび乳房はグニグニと形を変えながら
それを受け入れる。
まるで体の全部が目の前の男の為だけ
にあるようで、それが俺をひどく興奮
させた。
ぐーぐー
ぐーぐー
どくどく
ムニュ
ムニュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ

（ふぁっ❤おっぱいチンコでいっぱい擦られて、なんだか俺まで気持ちよくなって…っ❤）
（はぁ…はぁっ❤ま、ずっ…❤感じすぎて乳首立ってきた❤）
（早くイかせないと先に俺の方がイっちまいそうだっ❤）
ぐーぐー
ぐーぐー
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

「ほら、これが良いんだろ❤ぐに、ぐに、ぐに❤いけ、いけ❤俺のおっぱいでイっちゃえっ❤」
「…っ、すごい乳圧でっ❤…凛音、僕もう、でそうっ…！」
「いいぞ❤このまま精子おっぱいの中に出しちまえ❤」
「だすよっ！凛音…っ！」
ぐぐぐ
ムニュ
ムニュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ
ムギュ

「んっ…❤」
ビュルビュルと容赦なく吐き出された精液が濃厚な雄の臭いを染み込ませながら胸いっぱいに広がる。
ビューッ♡
ビューッ♡
ビュルルルッ♡
ビュルルルッ♡
どくん
（はぁ、あぁっ❤亮の精液、おっぱいに沢山ぶっかけられちゃったぁ❤）

（すご…ぉ❤おっぱいが亮の精液の臭いでマーキングされてるみたいだ❤）
（ヤバいな…❤臭いだけでお腹の奥が疼いちまってる）
（こんなの我慢できるわけないよ…❤）
「お前が激しくするから俺まで火照って来ちゃったじゃないか❤こんなにした責任ちゃんと取れよな❤」
どくどく
どくどく
どくどくどくどく

「は、あああっ❤ひろ、がってくぅっ…❤チンコ深く刺さってオマンコ亮の形になっていくぅ❤」
「凛音っ！凛音っ！」
「はぁ❤あっ❤あぁっ❤これ、すごい❤ズンズン突き上げられて、子宮降りて来ちゃってるよっ❤」
はぁ❤
ビクッ
ハーハー❤
ハーハー❤
あぁぁぁ❤
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ

膣を締め付けながら大胆な腰つきで
上下に動き刺激する。
元男の方が先天性の女よりエロくなって
しまうと聞いたことがあるがそれは本当
だったのだろう。
何せ俺がそれを直に体験しているの
だから。俺はそれほどまでに淫らに
なってしまっているのだ
ビクッ
ビクッビクッ
ん
ズボッズボッ
ぱっ!ぱっ!ぱっ!

「はぁ❤あ、あぁ❤んくぅっ❤出たり入ったりしてるとこ見られて恥ずかしいのに気持ちよくて腰止まらないっ❤」
まるで情婦のようにいやらしく腰を振る自分に、男だった時の己はもういないのだと確信するが。亮が相手ならそれでもいいと思えてしまう。
はぁ❤
ビクッ
ハーッ❤ハーッ❤
あぁぁ❤
パンパンパンパン
ズボッズボッ

「んっ❤ははっ❤いま、中で精液ぴゅっぴゅって膣内にお漏らししちゃってるぞ❤」
「気が早すぎ❤ほら、もっと出来るだろ❤」
はぁ❤
ビクッ
ハーハー❤
ハーハー❤
ぱんぱん
パパ
パパ

「こ…のっ！」
動きに強弱を付けながらグニグニと刺激すると亮も負けじと激しく突き上げる。俺たちはお互いに競うように快楽を貪り合った。
ビクッ
ハーハー
ハーハー
ドクッ
ドクッ

「ひぁっ❤あぁっ❤気持ちいいとこトントンされながらチンコが膣内で暴れて…っ❤」
「あああぁっ❤奥に響いて…っ❤んあぁっ❤へんに、なるぅっ❤」
はぁ❤
はぁぁ❤
ビクッ
ビクッビクッ
ドクッドクッ
パン!パン!
ズボッズボッ

「凛音のトロトロまんこすごい絡み付いてきて…っ！う、くっ！」
「出すぞ凛音っ！お前の子宮に精液注ぎ込むからな！」
「ふぁ❤あっ❤あぁっ❤うん、だしてっ❤びゅっびゅ～ってして一緒にいこう❤」
はぁ❤
はぁぁ～ッ❤
ビクッ
ビクッビクッ
ドクッドクッ
ドクッドクッ
ドクッドクッ

びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
「ひぁっ❤あぁっ❤で、出てるぅ❤
お腹のなか熱い精液いっぱいで
タプタプしちゃってる❤」
はぁ❤
ビクッ
ビクビクッ
はぁぁぁっ❤
ドピュッ❤
ドピュッ❤
ドピュッ❤

普段は男の時のようにガサツなのに
一度セックスを始めたら彼女はこんなにも乱れる。
他の誰も知らない…見せたくない。
僕だけが知る凛音の女としての顔。
(ああ、そうか。ようやく自覚できた。
僕は凛音のことが好きなんだ)
ビクッ
ビクビクッ
ん。
ドピュッ
ビュッ♥

元男相手だからと自分の気持ちに
気付かないように誤魔化していた。

けど好きだって気持ちになったのは
今まで凛音と過ごして来た時間の
積み重ねがあったからだ。

だから今なら自信を持って言える
僕は彼女が好きなんだって。

「…なぁ、凛音。もう
こんな関係、終わらせないか？」
「……は？え、あ、何？」
亮のいきなりの言葉に脳が理解する
のを拒み一瞬、体が固まってしまう。
今なんて言った？
この関係を終わらせると言ったのか？

亮に振り向いてもらう為なら、
なんだってやるつもりだった。
俺から身も心も離れさせない為に
普通の女じゃしない事だって躊躇い
なくするつもりだった。
…それに亮も俺のことを女として
意識してきていると思ってた。
だから想像もしていなかった。
亮にこんな事を言われるなんて…。

「何って……」
「…っ！何でいきなりそんなことっ！俺、何かしちゃったか⁉もし何か怒らせるようなことしてたなら直すよ！だから…っ！」
「ち、違うよ！そうじゃないんだ。ごめんな、言い方が悪かった」
「僕はただ、今のハッキリしない関係を終わらせて…普通の恋人になろうって言いたかったんだ」

驚きで呼吸が止まってしまうかと思った。
いま、亮は恋人になりたいと言ったのか？
深く深呼吸をし呼吸を整えようとするが
心臓はバクバクと激しく鼓動しちっとも
いうことを聞いてくれない。
それでも俺は今の言葉が夢ではない
と確認するために恐れ躊躇いながら
も小さな声で問い返した。

「……いい、のか？俺なんかで」
「俺は元男だし、女になった理由も今思えばアホみたいなものだったし…」
「……うん、知ってる」
「全然、後先考えてなくて行き当たりばったり、ばかりだし…」
「何年一緒にいると思ってるんだよ。そんなの今更だろ」
「このまま、お前と一緒にいたら。好きだって気持ちが抑えられなくて、きっと離れられなく――」

「ーんぅっ❤ん…っ❤ふぅ❤」
続きを口にする前にキスで唇をふさがれる。
ラーラー
ちゅぷ
ドキ❤ドキ❤
ムニュッ
突然のことに状況を理解できず頭の中が真っ白になってしまう。
「…そんな凛音が良いんだ。そんな凛音を好きになったんだ」

唇が離れ亮の手は優しく頬を撫でてくれる。
お互いから視線を外せられない。
俺は熱病に掛かったように身体をあずけ寄り掛かると、その無防備な唇に再び自分の唇を合わせた。
あ…
ビクッ
ムニュッ

「はむっ、んふっ❤……ちゅ、ちゅぷ❤
はぁ❤はぁ❤んっ❤…熱っ❤舌、火傷
しちゃいそうだ…❤」
（キスってこんなに気持ちいいんだ…❤
う、ぁ❤やばっ…❤足腰に力が入らなく
なって、何も考えられなくなりそう❤）
ムニュッ
ちゅぷ
ん
ビクッ

舌が少し触れただけで身体は
ビクンッと小さく痙攣し、頬は
熱を持ち息が荒んでしまう。
蕩けている。今の俺は、そう表現する
しかない表情をしているのだろう。
はぁッ♥
ハーッ♥
ハーッ♥
ビクッ
ちゅぷ
ムニュッ

「なぁ…さっきの好きって、そう言うこと…だよな？」
「ああ、当たり前だろ。冗談でこんなこと言わないよ」
「…うん❤わかってる❤俺も大好きだ❤」
ムニュッ
ドキ❤ドキ❤
ビクッ
ブーン

「嬉しくて心臓がバクバクいってるし、頭もお前のことしか考えられないくらい蕩けてる」
「…けど、このまま進んだら俺、本当に戻れない。それでも、いいんだな？」
返事は言葉ではなく再びキスで返される。俺を求めてくれる情熱的なキスにどうにかなってしまいそうだった。
ムニュッ
ビクッ

「はむ❤ちゅ、ちゅぷ❤はぁ❤はぁ❤
チューしながらのセックスすげぇ❤」
「あむ❤ちゅぶ…ちゅる❤…あはっ❤
上も下も亮のでとろっとろだぁ❤」
いつもしている行為のはずなのに、まるで
初めての時のようにドキドキと心臓は
高鳴り、胸は多幸感に包まれる。
はぁッ❤
ズプッ
ズプッ
ぎゅっ

「ちゅ…じゅる…っ❤ちゅぷ❤んっ❤
亮のチンコ膣内でガチガチに膨らんで
ビクンビクンって跳ねてるぞ❤」
「仕方ないじゃないか。凛音がエロすぎる
のが悪い。こんなエロ可愛い子が目の前
にいて我慢できる奴なんていないよ」
ズプッ
ズプッ
ドクッ
ドーン
ドーン
クリッ
ぎゅっ
ん…

「んふふ❤そのエッチな子をひとり占めできるのはどんな気分なんだ❤」
「言わなくても分かるだろ？最高だよ。絶対他の男なんかに触らせてやるもんか」
「…うん❤ずっと亮だけのモノにして欲しいよ❤」
ぶんっ
ぶーん♡
ぶーん♡
どくっ
クリッ
ぎゅっ
ズプッ
ズプッ

舌を絡ませお互いの粘膜を絡ませながら
結合部からはいやらしい音と共に愛液が
溢れ出る。
自分の女だと主張するかのような
激しい動きに子宮が疼き熱くなっ
てしまう。
はぁッ♥
ぐッ
クリッ
ぎゅッ
ズボッ
ズボッ

「んっ！……んちゅ、ちゅ、ちゅる…っ❤
ふ、くぅっ❤あ、あぁ…っ❤敏感な
とこグリグリって…❤」
「チンコ奥まで届いてっ❤あっ❤あぁ❤
ふ、ぁ❤子宮口にキスされてる…っ❤」
ズプッ
ズプッ
はぁッ❤
どクッ
クリュッ
ぎゅッ

お互いが繋がり蕩けるような感覚に襲われ、頭の奥が白くチカチカと光る。
俺は雌としての喘ぎ声をあげながら気持ちよさのあまりに、身体を跳ねさせ震えながら潮を吹いてしまう。
はぁ♥
あぁぁぁ♥
どくっ
クリュッ
ぎゅっ
ズプッ
ズプッ

「お、ぉ！中がすごい締め付けてきてっ！
凛音のオマンコほんとにドスケベだな」
「ひぁっ❤あ、あぅっ❤だってこんな
ズプズプされたら…っ❤ん、あぁっ❤」
「おなか、めくれちゃうくらい気持ち
よくて…っ❤ん、あぁっ❤」
「なに、これ…っ❤いつもより…お、奥がぁ
ゴリゴリってええぇっ❤ふぁっ❤あっ❤
子宮の中まで入っちゃいそうっ❤」
ズプッ
ズプッ
はめ〜ぐ❤
あぁぁぁ❤
ぎゅっ

「は、あぁっ❤亮っ、好き…っ❤大好きぃ…っ❤」
「もっと壊れちゃいそうなほどいっぱいに…っ❤俺のオマンコが亮だけのモノって、しっかりマーキングしてぇ❤」
「ああ、凛音が僕の女だってしっかり証明してやる！」
はぁーっ❤
ぶんっ
クリュッ
ぎゅっ
ズプッ
ズプッ

びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
「お、おおぉっ❤でてりゅっ❤濃厚ザーメンお腹の中にビチャビチャかかってる…っ❤」
「あはっ❤子宮口でちんちんとキスしながら、だされちゃってるぅ❤」
子宮の奥に絶え間なく精液を叩き付けられるたび、身体は何度も跳ね深く絶頂してしまう。
びゅる
びゅー
ビクッ❤ビクッ❤
あぁぁぁ❤
ぎゅっ

「おっぱいでむにむにしながら
こっちも奇麗にしてあげるからな❤」
「あっ❤ぁっ❤凛音っ❤ちょっ…
まって…っ。うぐっ❤こんな、の
知らな…っ❤はぁっ❤あぁっ❤」
ハーッ❤
ハーッ❤
ビクッ
ムニュ
ムニュ

「チュッ❤くちゅ❤んっ❤じゅる…ずる❤
ずるるぅ❤れろ、れろ❤ちゅるる…っ❤」
お尻の穴にキスをし丁重に刺激するように
舐め解す。ゆっくりと円を描くようにしな
がら愛撫しヒク付く穴にそっと舌を入れる。
ビクッ
ラーラー
ちゅぷ
ちゅぷ
ムニュ
ムニュ

「れろ…れろぉ❤ぺろ❤…れろ、れろ❤」
「ふぁっ❤あっ❤凛音、そこ汚いからっ」
「何言ってるんだよ今更。今までだってチンコ舐めてやったろ？どっちもあまり変わらないよ」
ぴくッ
ぺろ❤ぺろ❤
ムニュ❤ムニュ❤

（はぁっ❤舌でクチュクチュされて尻穴すげぇヒクヒクしてる❤そんなに気持ちいいんだぁ❤）
（こんなおっぱい犯すみたいに腰ガクガク振っちゃって❤はは♪なんだか可愛いな❤）
（あぁ、どうしよう❤いま、すごく亮の顔みたいのに、もっとお尻舐めていたくて舌止まらない…っ❤）
ビクッ
ラーラー
じゅるるる
ムニュ
ムニュ

「じゅるる～っ❤じゅぶ❤ちゅぷ…❤
あむっ❤れろ、れろれろっ…❤」
亮が気持ちよくなってくれるならと、
何の抵抗もなくお尻の穴を舌で愛撫
する。
あぁ…亮の何もかもが愛おしくて
たまらない。
ビクッ
ラ～ラ～
ちゅぷ
ちゅぷ
ムニュ
ムニュ

「ちゅぷ…ちゅる❤こうやって
ホジホジされるの気持ちいい
だろ❤れろぉ❤れろ…ちゅ❤」
「このまま受け止めてやるから
いつでもびゅっびゅ～って
出して良いんだぞ❤」
「く、ぅ❤尻穴ほじられながらおっぱい
で擦られて…っ❤気持ちよすぎて
も、う…っ❤あ、あぁ❤やばい、イクっ❤」
ビクッ
ラ～ラ～
ちゅぷ
ちゅぷ
ムニュ
ムニュ

肉棒が跳ねると同時に胸の中に
溢れるほどの精液が射精される。
「はむっ❤…ぅ、ん…ちゅる、じゅるる❤
すごっ…❤おっぱい妊娠じちゃいそうだ❤」
ビュルルルッ❤
ビュルルルッ❤
ビクッ❤

「あはっ❤こうやって手を繋いでると恋人同士だって実感できてすげぇ嬉しいな❤」
愛おしげに絡めた指を動かし、まるで今ある幸せを噛み締めるように微笑む。
熱い吐息を吐くたび、膣は甘やかに絡み溶けて一つになる錯覚に陥ってしまいそうになる。
ビクッ
ハーハー
ハァ
ハァ

「亮❤ちゅーしよっ❤」
彼女はそう言うと優しく唇を重ねる。肉棒が根元まで包まれる快感に浸りながら、舌を絡め唾液を交換し合う。
ハーハー
ハーハー
ん
ぱぱ
ぱぱ

「ん…ちゅっ❤ちゅぶっ❤
好きだよ亮❤…愛してる❤」
「…っ❤」
耳元で囁かれた魅惑されるような声に
背筋がゾクゾク震え俺はまるで子供の
お漏らしのように彼女の子宮に精液を
注いでしまう。
はぁぁ〜ん❤
はぁ❤
ビュルッ

「…ふふ❤赤ちゃんの名前決めなくちゃいけなくなるかもな❤」
「できてるかな？」
「うん。たぶん、きっと…❤」
胎内に広がる精子を愛おしそうに受け止めながら彼女は幸せそうに僕に微笑みかける。
ビクッ
ハーハー
ぶぼっ